

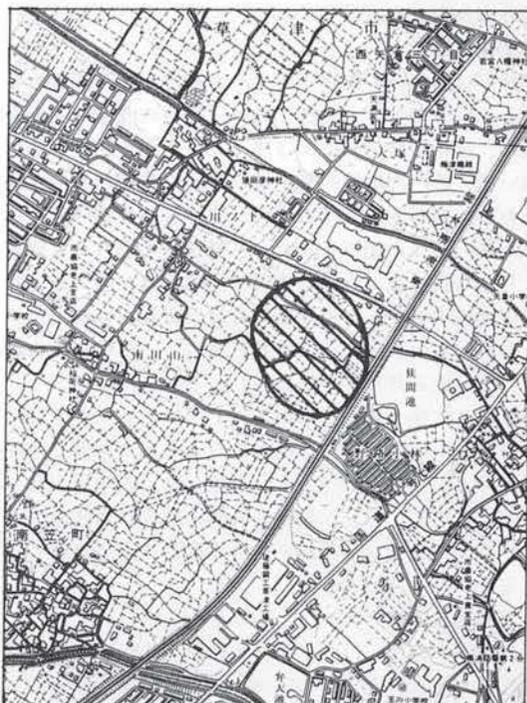
67. 野路岡田遺跡 発掘調査中間報告

位置と歴史的環境

野路岡田遺跡は、草津駅を核とした市街化区域の南西約2.5km、草津市野路町字岡田に所在する。

当該地の地勢は、現在でこそ水田地帯と化しているが、元来は、標高221.3mの牟礼山を最高峰とする瀬田丘陵北半の北西斜面に展開されたなだらかな丘陵地であったと言える。しかし、この丘陵地は、北方の北川、南方の十禅寺川によって開析され、いわゆる舌状台地としての地勢をなし、一見したところ小丘(岡)といった景観を呈すのである。

さて、当該地を含む草津市東南部から大津市瀬田にかけての低丘陵地には、大津市瀬田大江、三大寺、神領にまたがる近江国衙を頂点に、大津市瀬田には、勢多駅と推定せられる堂の上遺跡のほか、国分寺、国分尼寺と想定される瀬田廃寺、青江廃寺、中路遺跡が所在し、草津市には、野路町字小野山に奈良時代前半～後期の一大製鉄遺跡たる野路小野山遺跡が発見され、また、草津市追分町田白一帯に古代駅制にもとづいて設定された岡田駅とも考えられる岡田追分遺跡が所在する。このように、大津市瀬田から草津市野路、追分におよぶ低丘陵地上には、近江国衙の設置と東海、東山二道の整備に伴い、これらの古代政治機構と公交通網の発生と衰退を共に戴いたであろう官衙、官寺、官営工房が設置された。以来、本地域は、これらの公的施設を連結する古代幹線道の錯綜する交通上の要衝としての歴史的な性格を付与されたのである。事実、この地域の古道については、なお今後も究明を要するものの、近江国衙から発し、南大萱を経て草津市南笠町方向へ至る古代東海道・東山道が推定されているのを始めとし、岡田駅から甲賀駅を経て鈴鹿関に達する東海道、岡田駅から篠原駅へつづき不破関に至る東山道の存在も考えられるのである。また、野路周辺から田上、関津道、宇治道を経由して奈良に至る古道も推定されるのである。ひるがえって、本地域の中世における街道を考えれば、古代から継続した陸路とともに、武家勢力の軍事的活動と中世庶民の経済活動の高揚から発達した水上交通が無視できないのであるが、この点に



野路岡田遺跡位置図 1/20000

において、文献に著名な野路宿と矢橋、山田港とを結ぶ水陸連結路の発達が十分考えられる。特に本遺跡は、上記の矢橋港へ至る古道沿いに立地するとともに、先に掲げた田上道と呼ばれる古代以来の古道とも連結しているのである。

以上のような当地域の交通史上の特異な位置は、近世に至っても継承され、草津宿の成立という近世宿駅制度上の一大交通拠点の誕生に、その結晶を見るのである。(別所健二)

遺構

調査対象区の南半分、掘立柱建物9棟を含む約300のピット、井戸2基、築地状遺構1列、土壇4基等の遺構が検出された。これらは井戸1(SE1)を除いて、他は西側半分集中しており、標高は95m40～95m50である。

①掘立柱建物跡(SB1～SB9)

柱穴内の埋土の色調により、最低3時期に分けられるものと思われる。A類はその柱痕内に多量の灰が包含されており、B類は柱穴裏込めに炭化物が多量に認

められる。C類はこれら灰・炭化物が認められず、各種ピットの切り合いにより最も古い時期のものと考えられる。現在確認されている建物は9棟あり、SB9を除く他はすべて総柱の建物である。建物の規模は4間×3間のものが主体を占め、それらの方位はN-30°-E前後で統一される。またこれら柱穴内には多くの土器（大部分は破片であるが、完形に近いものも数点認められる）が出土している。

②井戸跡 (SE1、SE2)

井戸は調査区の南隅と中央やや南寄りで2基認められる。SE1は掘り方直径3.3m、井戸の内径1.3mを測り、深さは検出面よりほぼ3.2mを測る。検出時において、井戸内堆積の最上層には、平安期のものと思われる土師器・埴等の出土が認められ、井戸底よりの土器の出土が期待されたが、裏込めと思われる部分より、布目平瓦1点と須恵器片(甕)1点が出土し、井戸内堆積中層から、須恵器杯身ほか破片4点が出土するのみにとどまった。また井戸底には、井桁状に合計11枚より成る井戸枠が据えられ、そのほぼ中央より、くり抜きの桶1点が、口を上にして出土している。SE2は掘り方直径2.0m、深さ約3mを測る素掘りの井戸と考えられるものである。遺物は井戸内中層より、上部に集中しており、磁器、瓦等の破片が数点出土している。ここでは井戸枠その他木製品の出土は認められない。

③築地状遺構 (SD1、SD2)

調査区の南壁に沿って、2本の平行に延びる溝状遺構が認められ、北側の幅50cm、深さ10cm余を測るSD1の溝底より、二つずつ対になった柱穴が60cm間隔で並

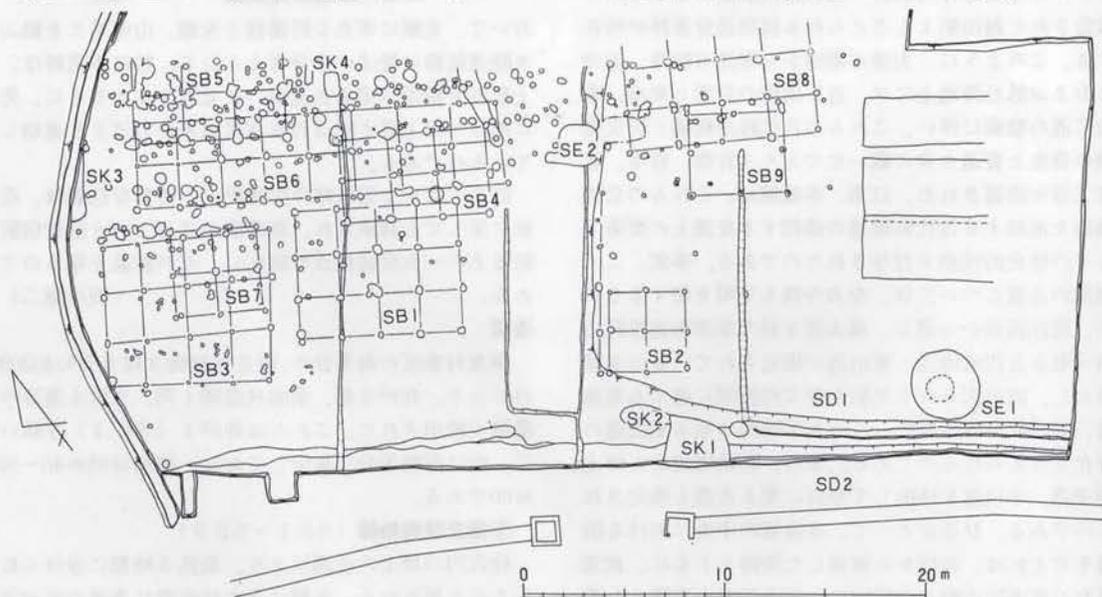
ぶのが確認された。断面観察によると、この柱列はSD1溝内埋土を切って掘りこまれており、直径8~10cmの柱痕が垂直に立っているのが認められる。またこの柱穴底より瓦、施釉陶器等の遺物が出土している。SD2は幅約60cm、深さ30cmを測り、SD1とはほぼ同様の瓦、施釉陶器の他、須恵質土器数点が出土している。この2本の溝は、調査区南東部ではほぼN-52°-Wを示しており、前述の建物群とはほぼ直角の方位を有している。

④土坑 (SK1~SK4)

SD2を切るSK1、SD1の西端部に位置するSK2と調査区西辺中央部に位置するSK3、さらにSB6北側に位置するSK4の4基が認められる。SK1より瓦・土師器・須恵質土器等が、SK2では極少ながらも土師器が、SK3では瓦・土師器(小皿)、須恵質土器(甕)、瓦器(埴)、磁器(白磁)等の良好なる遺物の出土がそれぞれ認められる。また、SK4は0.8×1.2mの方形土坑で、土坑底より土坑壁にかけて、1~2cmの炭化層が一面に貼りついている。ここからの遺物の出土は、ほとんど認められない。

遺物

当調査区の西北部において、遺構検出面(地山面)直上に厚さ20cm前後の遺物包含層が認められ、瓦器、須恵器、須恵質土器、土師器、施釉陶器、磁器等の土器と布目瓦が検出されている。また、一部掘り込みの遺構より、上記のもの他に、黑色土器がSE4より出土している。これらはいずれも平安時代末期~鎌倉時代前期のもの想定され、特に瓦器に関しては、今後の調査過程で出土が見込まれるものも含め、かなりの



野路岡田遺跡遺構図

個体数が期待される。

①瓦器

埴と小皿が出土しており、埴は形態上の特徴からA～Dの4タイプに分類できるものと思われる。Aタイプは底部より内彎しつつ立ちあがり、やや直立ぎみに口縁部に到達するもので、全体的に丸味を感じさせ、器高もC・Dタイプに比べ幾らか高いようである。このタイプの調整手法としては、内面に幅1.0～1.2mm前後の横方向のへら磨きと、外面口縁部付近での横方向のへら磨き、胴部の指圧痕等があげられる。

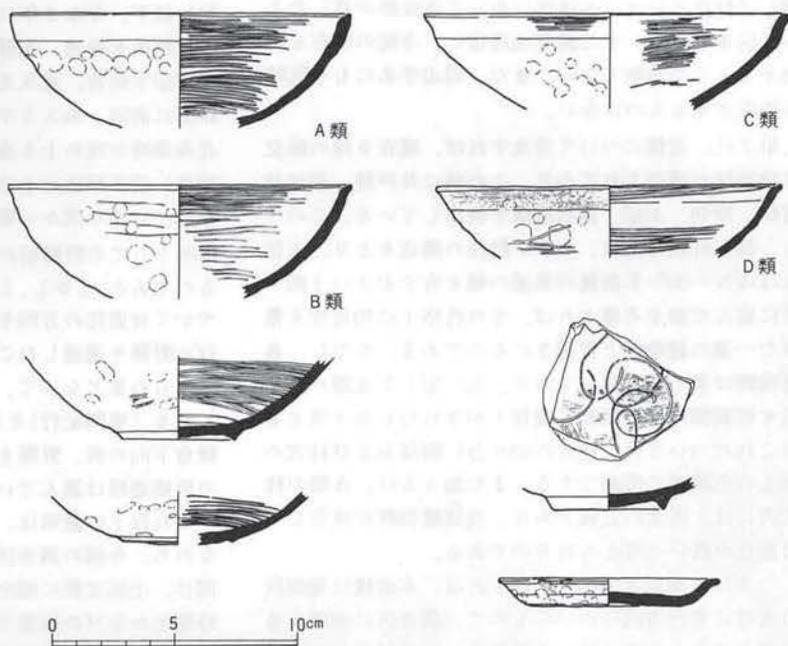
Bタイプは、Aタイプと形態、手法共にほぼ同様であるが、器高がAタイプに比べて高く、口縁端部の外方へのつまみ出しが特徴として認めら

れる。CタイプはA・Bに比べ器壁が薄く、口縁端部がほとんど水平に外方へとつまみ出されておられ、口縁内面に若干の肥厚が認められるものである。Dタイプは底部より外傾しつつ立ちあがり、口縁部で稜をなして、直立ぎみに口縁端部に至るもので、やや角ばった感じを与えるものである。また底部のみの出土例も数十点あるが、いずれも断面三角形の極めて低い貼り付高台を有し、高台部分径が極めて小さいものも認められる。また小皿は口径8～10cmのもので、外傾しつつ立ちあがる口縁は、その端部を外方へつまみ出されており、底部内面にへら磨き、口縁部内外面にはヨコナデが認められる。

これらの瓦器はいずれも暗灰黒色～黒灰色を呈しており、それが風化によるものか、焼成度によるものかは不明であるが、黒色で銀光沢を放ついわゆる瓦器とは見かけが異なっている。しかしこれらの持つ形態的、あるいは手法的特徴により、白石太一郎氏編年の、ほぼⅡ型式6段階とⅢ型式7段階に相当するものと思われ、相対時期を12C末～13C中葉と考えている。なお、SE4出土の瓦器埴は包含層出土のものより若干古いようである。

②瓦

大部分は凹面に布目、凸面に縄目を持つ平瓦であるが、凹面に縄目の上から施されたカキ目の認められるもの、凸面に離れ砂を用いた形跡の認められるもの等もある。また現在調査中の井戸(SE4)より、軒丸瓦



瓦器実測図

(2点)、軒平瓦(1点)がそれぞれ出土している。軒丸瓦は素弁8葉、1+6の蓮子を配する中房を持ち、間弁が直立縁部にまで及ぶもので、印籠作りと思われる。軒平瓦は残存部が極めて小さく、その全体を推測することは困難であるが、折り曲げの1枚作りで、側面はナデ調整が施され、筈は不明である。(石橋正嗣)まとめ

野路岡田遺跡の調査は現在も続行中であり、南北300m、東西400mにおよぶと推定される本遺跡の北端部の部分調査にすぎないという二つの限界を現時点においては有すものの、現調査段階で判明した諸事象を相互に検討すれば、以下記す本遺跡の重要性が浮かびあがってくるのである。

まず第1に、出土遺物については、一部包含層に古墳時代の須恵器片が混入されていたものの、これを除外すれば、瓦器、黒色土器、土師器、灰釉、緑釉、須恵質土器、青磁、白磁、布目瓦等、一部時代判定の困難な遺物が存するものの、大半は平安時代から鎌倉前期の遺物と考えられよう。特に主体をなす瓦器からすれば、平安時代後期、とりわけ後期後半(12C末)から鎌倉時代前期(13C前半)に限定され、他の出土土器のほとんども、同時期の相伴遺物と考えられる。ついで、布目瓦については、瓦当の出土が見られないので断定はさけないが、その手法、焼成状態から平安時代の比較的新しい時期が考えられ、一応、平安時代末頃のものと判断することができる。^①なお、瓦の出土に

関して付言すれば、当該地によって寺院跡が存したという伝承もなく、また調査地周辺に、寺院の所在を暗示するような地割もない。また、周辺字名にも寺院跡を推定させるものはない。

第2に、遺構について言及すれば、現在9棟の掘立柱建物跡が確認されており、この他に井戸跡、築地状遺構、柵列、土坑、溝状遺構を検出している。^②このうち、掘立柱建物跡は、大半が総柱の構造をとり、方位もほぼN-30°-E前後の共通の軸を有するという画一性に富んだ面を考慮すれば、その性格上に均質性を帯びた一連の建物群と把握されるのである。ただし、各建物跡は著しく重複しており、先に記した瓦器がさし示す短期間内に、頻繁に建替えがされたものと言える。(これについては、柱穴の切り合い関係および柱穴の埋土の色調差で推測できる。)また加うるに、A類の柱穴内には、灰土の包蔵があり、当該建物群が焼尽した可能性が高いと考えられるのである。

つぎに、築地状遺構を考察すれば、本遺構は発掘区の南端に東西方向にのびるもので、調査区に南隣する馬道と現在も称されている農道沿いに発見されたものである。無論、築地塀そのものの所在を証する遺構は検出されていないが、いわゆる雨落溝と思われる内外2溝が掘開されていたことと、先に記した馬道と称される古道沿いに掘込まれており、なんらかの区画を意図した構造物と推定せられること、さらに、内外両溝より布目瓦の出土を見ており、瓦葺きの長い建造物として把握することができること。以上の3点から、一応、築地跡と判断した。なお本施設は、その後、柵列に改修されたらしく、SD1内には、柱穴の残存が見られた。

以上に概説した出土遺物と検出遺構をまとめて、本遺跡の建物群の性格を解明する手がかりを考えて見よう。平安時代末から鎌倉時代前期にかけての約60年のあいだに、寺院でなく、築地をめぐらす、かなりの均一性を帯びた瓦葺き建物群で、野路町付近に位置する遺跡とはどのようなものであるのか。これらの点で考慮しなければならないのは、先に述べた当遺跡の立地である。東海道東山道の二大幹線路と、そこから分岐する支路と推定される古道近くに存するとともに、中世以降整備された湖上交通連絡路に密接な関係を有する本遺跡の性格として、交通施設の遺構と考えるのも、あながち的を逸したものではなからう。

さて、平安時代末期から鎌倉時代にかけての軍記物史書、日記、紀行文等の文献にあらわれた、世に著名な野路宿について、一覽してみよう。^③文献上、最初に野路宿があらわれるのは、治承4年9月(1180年)で、治承の乱のただ中、平維盛が頼朝討伐のため、大軍を率いて野路に宿したとあるのがそれである。(源平盛衰

記)以下、寿永2年に木曾義仲討討のため、平氏諸將が野路宿を通過。元暦2年(1185年)義経が野路に着し、平清宗を斬首。建久元年(1190年)頼朝が上洛途中、野路宿に宿泊。承久3年(1221年)後鳥羽上皇討討のため、北条泰時が攻め上る途中、野路に宿陣。暦仁元年(1238年)將軍頼朝が上洛途中、野路駅に逗留と言ったように、治承年間から暦仁年間まで、源平双方の武将の宿所としての野路宿が、これらの文献の中に確認できるのである。しかし、このような盛時があった野路宿も、やがて衰退化の方向をたどり、仁治3年(1242年)源親行が野路を通過したころには、家もまばらで、行人もとまらぬ里となって、荒廃化の進んでいることを記している。(東関紀行)そして、建治3年(1277年)阿仏尼が鎌倉下向の折、野路を通行したころには、一層野路宿の崩壊過程は進んでいたものと考えられるのである。

これ以上の説明は、本報告では不必要であろう。すなわち、今回の調査区から発見された諸遺構の存在期間は、上記文献に頻出する中世の宿駅、野路宿の盛衰時期とかなりの程度で重複するのであり、先に記した各遺構の実態を総合するならば、中世宿駅の一つ野路宿の部分的遺構と考えるのが妥当なのではないだろうか。今後、調査地周辺の地表下に埋没するのであろう遺構の解明を待てば、古代律令社会の駅制と近世幕藩体制下の宿駅制の過渡期に存した駅伝制を解明するのに、貴重な遺跡と確信するものである。

(別所健二)

註①その後、IV区調査中、井戸跡(SE4)より素弁8葉蓮華文の軒丸瓦三点と文様不明の軒平瓦一点が出土している。いずれも、平安時代後期の瓦と判断される。

註②その後の調査結果を併せると、掘立柱建物跡は16~17棟、井戸跡は4基に上った。なお、掘立柱建物跡には2間×8間の長屋風の長棟式建物が2棟見られる。

註③「源平盛衰記」、「吾妻鏡」、「東関紀行」、「十六夜日記」を中心に、「春能深山路」にも記録される。



P229 土器出土状況